

## 週日の説教

金 大烈 神父 2008年9月16日(火)

### 《子共のために祈っている母の姿が一番美しい》

信仰を持つということは、ある意味で笑顔でない顔をする権利を奪われたことになるのかもしれませんが。司祭であるのに、ミサを行う時、つらい顔や怖い顔をしていては、与かっている信者さんたちもミサに集中し難くなり、信仰も崩れてしまう恐れがあります。しかし司祭も人間ですから、気分がよいときもあるし、悲しいときもあるし、無理して笑わなければならないときもあります。神学生の時に「あなた方は、人の前で自分の否定的な感情を表す資格を失った」とおっしゃった学長神父様の話がいつも頭の中にあります。とにかく、自分の気分が悪くても、気持ちがよさそうな顔をして笑顔ですれば、相手からも笑顔が返されます。それによって自分の気持ちもよくなる体験をよくしています。笑顔は、神様がくださった素晴らしい薬かもしれません。疲れていても、不安に陥っていてもできるだけ笑顔を保とうとする心が、何よりも必要ではないかと思います。

今日の第一朗読(コリント 12・12 - 14, 27 - 31)を考えてみましょう。私たちは一つの体です。部分である私たち一人一人が、イエス様の体を一緒に作っていることとなります。イエス様が頭であり、私たちはその指になり、足にもなります。ですから、私たちはみんな離れているものではありません。それは、私たちみんなが知っています。個人的な振舞いや言い方によって、私たちはいつも人に影響を及ぼすことを意識しなければいけません。

とくに、信者ではないけれど、私たちがイエス様の子どもであることを知っている人と会うとき、自分が話す一言によって、その人にカトリックのイメージがはっきりと刻まれることをもっと意識しなければいけないと思います。そういう意味で、私たちは初めて出会ういろいろな人たちに、思いやりや、品位、明るさ、そして全然卑屈ではない顔を見せながらもへりくだる謙遜な心を表さなければなりません。

大体私たちは、第一印象で相手の人柄を推し量ります。自分によって、イエス様の顔が決まるかもしれない、という意識が必要ではないかと思います。みなさんも、イライラした顔を見せる権利を奪われたのかもしれませんが。それを意識しないといけないと思います。太田教会はいろいろな国の人々がイエス様のうちに聖霊によって洗礼を受け、一つの兄弟姉妹となっています。今日の第一朗読の物語は、私たちの共同体にぴったりあう話ではないかと思います。同じ日本人でも同じ立場の人間でも、人間にはいつもぶつかりがあります。しかし私たちは、お互いにうまくいくことがイエス様の栄光につながる、という意識を持つことも必要ではないかと思います。

福音(ルカ 7・11 - 17)に入ってみましょう。イエス様が歩いていたときにやもめの息子が死んで棺がかつぎ出されるところでした。それを眺めていたイエス様が哀れに感じて、「これ以上は泣かなくてもよい」とおっしゃり、死んだ若者を起こされたのです。それを見て私たちは何を悟るべきでしょうか。やもめから頼まれたわけでもないし、人々から頼まれたわけでもない。しかしイエス様はずっと眺めていて心が動き「若者よ起き上がれ」といって奇跡を起こされました。何を眺めてそのように心を動かされたのでしょうか？それは、母親の顔です。おそらくご自分が十字架にかけられて死んでしまうその過程を見ているお母様のマリア様の顔をあらかじめ思い浮かべたのでしょうか。そして、あらゆる母親の心の願いをよくご存知だったと思います。

韓国には、「子どもが親より先に死んだら、子どもを親の胸に埋める」という言葉があります。墓に埋めるのではなく、親が死ぬまでその子どもの死を胸に埋めなければならない。そのくらい親の心、特に母の心について強く言いあらわしている言葉です。

皆様に質問をします。子どものために、何を望みますか？子どものために本能的な母性ではなく、

母の心として、この子が本当に幸せになってほしいという思いで何を望んでいますか？

子どものために祈っている母の顔は一番美しいです。

神学校に入る前の晩、母の部屋に行って、母の傍で一緒に祈った記憶があります。家を出発する時には、後姿を見送っている母の姿をよく覚えています。そして、司祭になっているいろいろなところへ行くときも、私のためにどれだけ涙の祈りをしているかよく分かっています。それこそが、子どもに本当に幸せな道を歩ませる力のもとです。

今日の福音を通して、私たちはどのような心で子ども達を見ているのか、それをもう一回、考えてほしいです。足りないところがあれば、これから全力を尽くして子ども達のために心のこもった祈りをささげる信仰の生活をしましょう。

ありがとうございました。